



## 誰も「孤独」にしない努力

園長 野中 泉

アトムの駐車場の小さな桜の木は今は満開です。季節はいつもと変わらない春の訪れを運んできてくれていますが、この春は新しい仲間を迎えるうれしさと同じくらい、大きな心配が背中にとりあわせです。

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐために全国の学校が前触れもなく一斉休校を決めた日、「アトムは、開けてくれる？」と何人ものお母さんが心配して尋ねてきました。「もちろん、いつもどおり開いているよ」と答えたあの日の私自身の言葉は、あれから1ヶ月が経とうとしている今、ずっと重い責任を持つ言葉になりました。

『非常事態』『外出自粛』という緊張感のある言葉がテレビから絶え間なく聞こえ続けるようになり、長引く自粛に多くの人たちが経済的にも深刻な状況に陥っていることはみんなの知るところです。一方で今日もゴミは処理され、水道も出てガスも来ている。スーパーには食べ物が並び、病気になれば病院で診てもらえる。つまりこんな時でも、この国では人々の暮らしを支えるために通常どおり働き続けている人たちも沢山いるのだと今更ながら気づかされます。そして、その双方の人たち(親たち)の子どもが通う保育園は、この間もずっと開き続けています。

園を開くことに不安や葛藤がないと言ったら嘘になるような毎日の中、去年の今頃カリキュラムの見直しをしていた際のおっちゃん(市原理事長)の言葉をふいに思い出しました。「やりきれないような事件が起きる度に、社会の何が犯人をここまで追い詰めてしまったのか、二度とこんな孤独で辛い人を出さないために、私たちができることは何かと、親と保育士が必死で考えあつてきた。それがアトムのカリキュラムの根本」。今私たちが直面している不安は、命に関する未知のウイルスへの感染リスクだけではありません。多くの人々の日常が突然失われたことへの不安、そして自分や家族が「感染者」として社会からはじき出されてしまうのではないかとという不安です。病に感染した人に「大変でしたね」と声をかけるのではなく「迷惑かけるな」と平気で罵倒する社会への不安です。「助けて」といえる関係づくり、「お互い様」の地域づくり。アトムの保育士が親たちと一緒に何十年もの間、一生懸命考え続けてきた「誰も孤独にしない」努力は、こんな時のためではなかったか。自分たちに問いかける日々です。

3月末のある朝、事務室横のテラスに散歩に行くみかん組の子どもたち(卒園児)が帽子をかぶって並びました。けれど、なぜか手をつないで並んだまま、5分たっても出発しません。どうやら出発直前にけんかになった子どもたちがいたようです。「もう、公園に行く時間なくなる」途中でしびれをきらした誰かがぼやきましたが「でもな、納得できへんて言うてる友だちほっといて、公園行かれへんやんか」という直ちゃん(福島保育士)の普段どおりの声と、怖い顔でにらみあっている友だちの姿に「これは、しゃあないな」と納得したのでしょうか。当たり前のようにけんかの当事者たちの気が済むまでみんなで待ち続ける子どもたちの姿に、他者の気持ちに気づきながら育ちあう園の日常が守られている今日を感謝せずにはいられません。

15分近くかかって、けんかも無事決着したようです。何事もなかったように「行ってきまーす！」と元気に出発した子どもたちの背中に励まされながら、今日もアトムは開いています。